

# 本号掲載の論文要旨

『横笛草紙』

弘法大師笛説話と義経物

樋口千紘

御伽草子『横笛草紙』諸本のうち清涼寺本に、主人公横笛の出生譚がある。その中に、弘法大師が天竺に渡って三つの笛を得たとする笛説話があり、同説話は義経物の幸若舞曲や御伽草子にも見られる。そこで義経の名笛伝承を整理し、その中に『横笛草紙』の笛説話を位置づけることによって、『横笛草紙』の笛説話が義経物と関わって生成されたこと、横笛出生譚も同様に弘法大師の笛の成徳を語るものであることを示した。

『源平闘諍録』における  
義経像

畠中愛美

読み本系『平家物語』の一本『源平闘諍録』における源義経像について、まず従来指摘されている源頼朝・梶原景時との関係性による加筆・改変を確認した。その上で、巻八之下「一の谷・生田の森合戦の事」に見られる義経と季重の描写から、義経が他者と対立することを避ける人物として描かれているとし、兄弟関係から離れた箇所にも義経像に工夫が見られることを指摘した。

『富岳雪譜』小論

—その資料性と文芸性—

中村 誠

資料性に関しては、一部検討の余地は残るものの、近世後期の富士登山を知る好個の資料であること、近代的登山者像が現れていることを示した。  
文芸性については、叙景の特色、事実を描くことを越えた虚構性の問題等について論じた。また、従来登山記としてのみ読まれてきたとして、紀行全体の構造を通して読むことの必要性を指摘した。そしてそのことによって、登山記とは異なる紀行の相貌が現れることを示した。

## 茨木のり子の新資料

### 物語「電話」

―母を亡くした小学生の心の支え―

熊谷 誠人

茨木のり子が一九六六年に書いた物語「電話」が見つかった。病気で母を失った小学生の心を描いた放送劇の台本である。茨木自身が十一歳で愛する母を亡くしたが、「電話」はその主題を正面から扱ったものであり、繊細な感受性を持った子供がどのように自らの心を支え、どんな風に現実を生きたかを描き出している。そこには茨木自身の姿が投影されていると読み取ることができる。本稿では茨木の新資料として「電話」の全文を掲載した。

### 副詞「よく」の意味を規定する基準のあり方

川端 元子

本稿では、副詞「よく」の程度・頻度・評価の意味を規定する文脈情報に注目した。程度や頻度の「よく」は、「よくP」という到達目標としてその事態の達成・実現を述べる。このとき、「よくP」は事態の達成・実現が到達目標であるとともに評価の基準であるため、事態の達成・実現の可否を述べるものとなるが、事態の達成・実現について発話時の前提をもとに期待されるあり方と対比されたとき、評価の意味が生じることがわかった。

### 接続表現からみる「まあまあ」「まずまず」の評価性について

原 美築

本稿は、程度を表す〈まあまあ〉〈まずまず〉について、対象語と共起する接続表現の種類による分類から、「事態に対する話し手の見方（結果として現れた事態を好ましく捉えているか否か）」について論じたものである。調査によって、並列系の接続表現は〈まずまず〉が取りやすいこと、逆接表現の出現位置が〈まあまあ〉と〈まずまず〉で異なることなどを明らかにし、その傾向や特徴から導き出される二語の「評価性」の違いについて言及した。

現代日本語の感情動詞「喜ぶ」  
におけるヲ格／二格選択要因

松野 美海

現代日本語の感情動詞「喜ぶ」は「幸運（を）に」喜んだ」のように、ヲ格、二格の両者を許容する。本稿では各々の差異から選択要因を探るために、実例の記述考察を行った。これにより、格選択においては、コト・ノ節の選択、ヲ／二格名詞の時間的性質、非個別事態の描写か否かが関与することを明らかにした。これらは「喜ぶ」がヲ格をとる場合、感情生起時点から離れた説明的な描写が可能であることに起因すると主張した。

副詞「きっと」の語史―推量の  
用法の成立についての考察―

吉本 裕史

本稿では、擬態語から陳述副詞への変化が指摘される「きっと」の歴史的变化を考察する。先行論には述語形式との呼応を重視するものがあるが、本稿は歴史資料の用例に、呼応という意味的關係を見出すことは難しいとの見方を示す。そこで、文脈や統語条件を元に、出現期から近世後期までの「きっと」の意味に注目する方法をとる。結論として、人間の行為の様態を表すものが、事態に対する評価を表すようになる変化を経た、「きっと」は近世後期時点で陳述副詞的段階に至ることを指摘する。

『類聚紅毛語訳』『服飾』部の  
色名と「六十種間色」

櫻井 豪人

森島中良編『類聚紅毛語訳』の「服飾」部末尾にある色名部分について、新資料「六十種間色」を提示しつつその編纂方法を示す。先行研究の指摘通り、『類聚紅毛語訳』の訳語は『雑字類編』の漢字表記や仮名表記の影響を受けており、「服飾」部末尾の色名も『雑字類編』と一致する語がほとんどであるが、異なる部分も多少存在する。その部分を手がかりに、当該箇所の色名に関しては『雑字類編』から直接抜き出されたのではなく、オランダ語も含めて「六十種間色」によっていることを論証する。

## レザノフ資料の批判的検討

### 駒走昭二

レザノフ資料に記載されている日本語は18世紀末の仙台石巻方言を反映していると考えられるが、そこから方言学的特徴を抽出するために史料批判が不可欠である。本稿では、同時代の仙台方言書との照合を通じてその史料的価値を確認した。また、方言学のこれまでの成果とも照合し、本資料が必ずしも当時当地の言語実態を反映しているとは限らないことも指摘した。そこには本資料の作成に携わった善六の日本語観が影響しているものと考えられる。

## 主格助詞「が」に係る述語

### の拡大

― 上代から中世までを対象に ―

### 金 銀 珠

本稿では、上代から中世にかけて、主格助詞「が」の述語がどのように拡大したのかについて考察した。主格助詞「が」の述語は「活動動詞↓非活動動詞↓形容詞(↓名詞)」「変化動詞・存在動詞↓状態動詞」「位置変化↓状態変化」の順に拡大し、いずれも状態性が高い方へと拡大した。述語の拡大のプロセスは外界の世界を言語化する際の認知の仕方である行為連鎖のプロセスと類似する所があった。また、「が」の本来の機能である「指示」機能を基盤として新情報提示用法や談話的際立ちの用法に拡大したものと考えられた。

## 奈良時代語における

### 助辞ケリと助辞ケム

### 小出 祥子

万葉集を例として、奈良時代語の助辞ケリと助辞ケムの意味機能を考察した。ケリとケムは、「知識や期待、予想として、詠み手が予め意識していた事態」に関わる助辞であることを示した。また、ケリ句事態は詠み手が直接確認できざる事態であるのに対し、ケム句事態は詠み手が直接確認できない事態である点で異なる。ケリとケムは、従来、過去に関わる助辞として分析されてきたが、事態の認識のされ方に関わる助辞であることを述べた。

機械時代の川端康成における  
「ガラス化する身体」

— 『青い海黒い海』『針と硝子と霧』  
『水晶幻想』をめぐって—

吉原 万里矢

機械に注目が集まった1930年代前後、人々は人造人間に強い関心を抱いていた。川端康成もまたそうした人々の一人であった。本稿では「青い海黒い海」「針と硝子と霧」「水晶幻想」等の作品において透明化する人間あるいはガラス化する人体の表象を繰り返し描いていることに注目し、身体が白昼夢の中で非人間化し、それがガラスという新しい物質と関連付けられる点に川端独自の問題意識があることを明らかにする。